

「ぶんぶんひろば」における授業の実践
「保育内容（造形表現）」
(学芸学部 子ども学科)

1 対象学生および活動日

本学における「保育内容・造形表現」は幼稚園教諭一種免許状もしくは保育士資格取得のための選択必修科目で、主に学芸学部子ども学科の2年生が履修する。実習を経験していない2年前期に開講される科目として、「造形活動を通した乳幼児理解」をその修学目標のひとつに掲げている。そのため、授業計画の中に「乳幼児および保護者と関わる実践」を取り入れている。その実践内容として、子ども・子育て支援研究センターでの「シール貼り」と、近隣の幼児教育施設「ぶれいすくーる・ちゅーりっぷ」の協力を得て行う「造形まつり」が挙げられる。

2012年度のこの科目の履修者はグループA 22名(男子9名、女子13名)、グループB 35名(男子14名、女子21名)の計57名であった。2012年度は時間割の関係から、子ども・子育て支援研究センターでの実践はグループAのみが可能で、6月19日(火)2限目に行った。

授業への出席状況や態度、提出物などに問題があり、参加が認められなかった者6名と教育実習のため欠席をした者1名を除く計15名(男子4名、女子11名)が子ども・子育て支援研究センターでの実践を行った。

2 「シール貼り」という活動

おおむね1歳3ヶ月～2歳未満の発達として、「歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強くなる。」ということが挙げられる。

これらの「つまむ、めくるなどの運動機能の発達」や「環境に働きかける意欲」、「みたて活動」、「人や物への関心」を育てる活動の一つとして、「シー

ル貼り」は、多くの保育園で0歳児クラスから実践されている活動である。赤や青などの円形のシール(直径1.5cm～3cm)を保育士が用意した型紙の上に貼ることにより、乳幼児は何かしらのイメージを作り上げて(仕上げて)いく。

この活動を行う時の留意点として、「シール台紙からシールを剥がして、用意された台紙に貼付けるという一連の動作が、子どもにとっては容易でないことを理解し、ゆっくりと見守る」ということが挙げられる。用意する台紙は「子どもの生活と関連させる」工夫が必要であるとともに、「あまり要素を増やさない(複雑なものにしない)」「紙の大きさ」などに注意を払わなくてはならない。さらに、シールの直径が小さすぎる場合、難易度が高くなり、子どもが思い切った活動を行えず、「楽しさ」を味わえないことにも注意が必要である。子どもたちが自発的に「シールを貼りたい」と思うような「生活に関連した親しみやすいモチーフ」や「導入」の大切さ、さらには、幼児の造形活動は「子どもと保育者の対話」のための空間と時間であるということを理解することが大切である。これらのことを踏まえ、学生は色画用紙の「切り貼り」による台紙を1人3点作成し、実践の流れを設定(保育指導案の様式)した上で実践に臨む。

3 学生たちの反応

多くの学生は子どもと行う活動に期待を寄せ、考え、工夫をして台紙を作成した。学生の95%は今回の活動を「楽しかった」と感じ、「満足している」と答えた。難しかった点としては「子どもと打ち解けるのに時間がかかった」「お母さんが間に入ってくれなかったら、子どもとコミュニケーションが取れなかった」「保護者とのコミュニケーションが上手く取れなかった」「子どもの集中力が短いのに驚いた」「他のおもちゃに気を取られてあまりシール貼りに興味を示してくれなかった」などが挙げられた。また、「1歳から2歳の子どものために、シールを剥がして貼ることが、こんなに難しいことだとは実際に見るまでは信じられなかった」という学生もいて、「子どもと行う実践」が、学生の幼児理解を深めるために重要であることが再確認された。

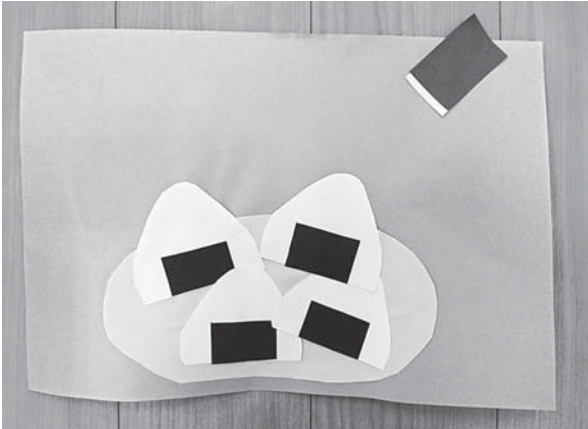


写真1：「おむすびにふりかけをかけてね。」子どもたちはシールをふりかけにみたてて、貼っていく。



写真2：シールを貼る子どもに声かけをする学生。「つまむ、めくる運動機能の発達」に注目。

4 まとめ

授業内で子どもたちと「造形活動」を行う実践は、学生数、授業時間、実践場所、乳幼児の動員などの兼ね合いが非常に難しく、準備やセッティングに多くパワーを必要とする。しかし、実際に乳幼児やその保護者と触れ合いながら、造形活動をすることによる「学び」は大きく、今後も積極的に取り入れていきたい活動である。学生の多くは、乳幼児と関わる経験が極めて少なく、その月齢や年齢に応じた「可能」「不可能」を実感していない。学生は、様々な授業で「身体の発達」「心

の発達」「言葉の発達」などを知識として学ぶが、乳幼児との活動という実践を通して、それらを総合的なものとして捉え、「乳幼児の造形表現能力の発達」について、「乳幼児の身体的能力の発達」と関連して経験的に理解を深める。

一方、こうした「実践」に参加する乳幼児の「育ち」に関してはどうであろう？乳幼児にとって造形表現というものは身体表現や音楽表現と同様、体を主体的に動かし、自身の存在を確認しながら外界に働きかけていく活動である。その中で芽生える「思い」を保育者や保護者が受け止め、共感し、コミュニケーションをとることによって、造形活動は子どもの成長に寄与する活動となる。今回のような実践は多くの場合、学生と乳幼児との関わりにおいても、活動内容においても「1回限り」のものになりがちである。乳幼児の「育ち」を考慮した場合、家庭や保育園・幼稚園のような「連続性」を持つ環境がより理想的であることは否定できない。同時に、乳幼児にとっては短時間であっても「経験」がその発達に大きな影響を与えることは事実である。学生がひとりひとりが、それらのことを理解した上で、乳幼児や保護者とコミュニケーションを主体的に取りながら、自覚と責任を持って、実践に参加するようなプログラム作りが今後の課題である。

(文責：学芸学部 子ども学科 小笠原 文)



写真3：「火事だ！消防車から水を出して火事を消そう！」男子学生ならではのアイデアに喜んでシール貼りを行う男児。